

半七捕物帳

三河万歳

岡本綺堂

青空文庫

ある年の正月、門松かどまつのまだ取れないうちに赤坂の家うちをたずねると、半七老人は格子の前に突っ立って、初春ちまたの巷のゆきかいを眺めているらしかった。

「やあ、いらつしやい。まずおめでとうございます」

いつもの座敷へ通されて、年頭の挨拶かたが式のごとくに済むと、おなじみの老婢ばあやが屠蘇の膳を運び出して来た。わたしがここの家で屠蘇を祝うのは、このときが二度目であつたように記憶している。今とちがって、その頃は年礼を葉書一枚で済ませる人がまだ

少なかったので、表には日の暮れるまで人通りが絶えなかった。獅子の囃子はやしや万歳の鼓つづみの音も春めいてきこえた。

「麴町辺よりこちらの方が賑やかですね」と、わたしは云った。

「そうでしょうね」と、老人はうなずいた。「以前は赤坂よりも麴町の方が繁昌だったんですが、今ではあべこべになったようですよ。麴町も赤坂も、昔は山の手あつかいにされていた土地で、下

す。麴町も赤坂も、昔は山の手あつかいにされていた土地で、下たまち町にくらべるとお正月気分はずっと薄かったものです。川柳に

も『下戸げこの礼、赤坂四谷麴町』などとある。つまり上戸は下町で

酔いつぶれてしまいが、下戸は酔わないから正直に四谷赤坂麴町まで回礼をしてあるくわけで、春早々から麴町や赤坂などの年始廻りをしているのは野暮やぼな奴だというようなことになっていたん

です。しかし万歳だけは山の手の方にいいのが来ました。武家屋敷が多いので、いわゆる屋敷万歳がたくさん来ましたからね。明治以後には出入り屋敷というものが無くなつてしまいましたから、万歳も一年ごとに減つて行くばかりで、やがては絵で見るだけのことになるかも知れません」

「どこの屋敷にも出入り万歳というものがあつたのですか」と、わたしは訊きいた。

「そうです。屋敷万歳はめいめいの出入り屋敷がきまつていて、ほかの屋敷や町家へは決して立ち入らないことになっていました。幾日か江戸に逗留して、自分の出入り屋敷だけをひと廻りして、そのままずっと帰つてしまうのです。町家を軒けんべつ別にまわる町万

歳は、乞食万歳などと悪口を云ったものでした。そういう訳ですから、万歳だけは山の手の方が上等でした。いや、その万歳について、こんな話を思い出しましたよ」

「どんなお話ですか」

「いや、坐り直してお聴きなさるほどの大事件でもないのです……。あれは何年でしたか、文久三年か元治元年、なんでも十二月二十七日の寒い朝、神田橋の御門外、今の鎌倉河岸がしのところに一人の男が倒れていました。男は二十五六の田舎者らしい風俗で、ふところに女の赤ん坊を抱いていた。それが、このお話の発端ほったんです」

男は息が絶えていた。師走しわすの風の寒い一夜を死人のふところに

抱かっていた赤児は、もう泣き噎かれて声も出なかったが、これはまだ幸いに生きていた。つい眼と鼻のあいだの出来事であるから、検視のまだ下おりないうちに半七はすぐに其の場へ駆け付けてみると、死んだ男のからだには何も怪しい疵きずのあとは無かった。抱いている赤児にも別条はなかった。しかし半七をおどろかしたのは、その赤児が二本の鋭い牙きばをもっていることであつた。赤児は生まれてからまだ二ヶ月か三月しか経つまいと思われるぐらいの嬰児みどりこであつたが、その上顎の左右には一本ずつの牙が生えていた。俗にいう鬼つ児である。この鬼つ児をかかえて往来に倒れていた男——それには何かの仔細があるらしく思われた。近所の人にだんだん問い合わせると、前の晩の夜ふけに彼によく似た男が通りが

かりの夜鷹蕎麦よたかそばを呼び止めて、爛酒かんざけを飲んでいるのを見た者が
あるとのことであつた。それらの話から考えると、かれは寒さしの凌
ぎに爛酒をしたたかに飲んでの前後不覚に酔い倒れて、とうとう
凍え死こごんでしまったのではあるまいかと半七は判断した。かれは
木綿の財布こぜにに小銭を少しばかり入れていただけで、ほかにはなん
にも手掛りになりそうなものを持っていながつたが、半七はその
右の手のひらの鼓つづみ 胝みだこをあらためて、彼はおそらく才蔵であろ
うとすぐ鑑定した。たとえ万歳であろうが、才蔵であろうが、勝
手にくらい酔つて凍え死んだというだけのことであれば、別にむ
ずかしい詮議はいらない。そのまま町役人ちやうに引き渡してしまえば
いいのであるが、彼のふところに抱えていた赤児の来歴がどうも

判らなかつた。他国者の才蔵が赤児をかかえて、寒い夜なかに江戸の町なかをさまよい歩いていたという、その理窟が呑み込めなかつた。殊に赤児が二本の怪しい牙をもっているだけに其の疑いはいよいよ深くなつた。

やがて町奉行所から当番の役人が出張して、医師も立ち会いで検視をすませたが、死人のからだには仔細なく、やはり大酔のためみちばたに路傍に倒れて、前後不覚のうちに凍死を遂げたものと決められてしまった。しかしかれの抱えている鬼つ児の正体は係り役人にも判らなかつた。半七は八丁堀同心菅谷弥兵衛の屋敷へ呼ばれた。

「どうだ、半七。けさの行き倒れは、何者だと思ふ。あんな因果

者を抱えているのをみると、香具師やしの仲間かな」と、弥兵衛は云った。

「さあ、手のひらの硬いぐあい工合がどうも才蔵じゃねえかと思ひます
が……」

「むう。おれもそう思わねえでもなかつたが、香具師ならば理窟が付く。やあぼんぼんの才蔵じゃあ、どうも平ひょうそく仄そくが合わねえ
じゃあねえか」

「ごもつともです」と、半七も考えていた。「しかし旦那の前ですが、その平仄の合わねえところに何か旨味うまみがあるんじゃないやありませんまいか。ともかくもちつと洗いあげてみましょう」

「せつきしわす節季師走せつきしわすに気の毒だな。あんまりいい御歳暮でも無さそうだが、

しやけ
鮭の頭でも拾う気でやってくれ

「かしこまりました」

半七は受け合つて八丁堀を出たが、どこから手をつけていいかちよつと見当が決まらなかつた。大江戸の歳の暮に万歳や才蔵を探してあるくのは、その相手のあまり多いのに堪えなかつた。なんとかして手つ取り早く探し出す工夫くふうはあるまいかと考えながら、師走の忙がしい往来を、本郷の方角へぶらぶらあるいて来ると、橋の袂で二十四五の男に出逢つた。

「やあ、親分。お早うございます」

かれは亀吉という手先であつた。もとは豆腐屋の倅で、道楽の果てから半七のところへ転げ込んで来たので、仲間では豆腐屋亀

と呼ばれていた。

「おい、豆腐屋。いいところで面つらを見た。おめえにすこし助すけて貰もらいてえことがあるんだが……。おめえは鎌倉河岸の行き倒れを知しっているか」

「知しっています。今おまえさんの家うちへ行いつて、姐あねさんから詳しい話を聴ききました。その行き倒れの抱かかえていた因果者いんがしやというのが変あじやありませんか」

「それを少し洗あらって見てえんだ。才蔵さいざうが因果者いんがしやをかかえて行き倒あれにななっている。どう考かんえても、変あじやねえか」

「変あですとも……。打うつちやつて置おくと、よその仲間なかまに飛とんだ鼻はな毛けを抜ぬかれませ

「そんなことがねえとも云われねえ」

ふたりは立ち話で相談をきめた。亀吉はおなじ子分の善八と手分けをして、亀吉は因果者師の方を調べる。善八は万歳の群れをあさる。こうして両方から洗いあげて行ったら、何かそこに一つの手がかりを見つけ出すであろうとのことであつた。

「じゃあ、頼むぜ」

亀吉にたのんで、半七は三河町の家へ歸つた。その夜の五ツ（午後八時）過ぎになつて、亀吉は寒そうな顔を三河町へ持つて来た。なにぶんにも自分ひとりでは手が廻らないので、彼はほかの子分どもにも加勢をたのんで、江戸じゅうの香具師や因果者師をそれからそれへと詮議したが、この頃に鬼つ兎などを取り扱つ

た者もなかつた。鬼つ児などを取られた者もなかつた。香具師仲間の詮議の蔓つるはもう切れた、と、亀吉は落胆したように話した。

「そうすると、因果者には何もかかり合いのねえ素人しろとの餓鬼かな」と、半七は考えながら云った。

「まあ、そうでしょうね。香具師の仲間で猫の児をなくしたとか云つて力を落している奴があるそうですが、猫の児じゃしやうがありませんからね」

「そうよ、けさのは確かに人間の子だ。猫の児じゃあねえ」

云いかけて半七は又かんがえていた。行き倒れの才蔵がふところろに抱えていたのは、決して猫の児ではなかつた。いくら因果者の鬼つ児でもそれが確かに人間の子である以上、それを畜生の児

と一緒に見なすわけには行かなかつた。しかしその一緒に見なされないものを一緒に結びつけて考えるのが、自分たちの眼の着けどころであると半七は思った。人間の子と猫の児と、そこにはどういふ不思議の因縁がからまっているかということをや彼はいろいろに考えてみた。

「そこで、そのなくしたとかいふ猫の児はなんだ。金眼か銀眼か、それとも尻尾しっぽが二、三本あるとでもいふのか」

「それは聞きませんでした。猫の児じゃあしようがねえと思ったもんですから」と、亀吉はきまりが悪そうに頭を搔いた。「すると、その鬼つ児と猫の児と何か係り合ひがあるんでしょうか」

「そりやあまだ判らねえ。が、それがどうも気になる。御苦労だ

がもう一度行って、その猫の児をどうしてなくしたのか。その猫はどういう猫か詳しく訊いて来てくれ」

「ようござえます。善八の方からはなんにも云って来ませんかえ」
「あいつの方からは沙汰なしだ。だが、あいつの方はちっと面倒だからすぐには行くめえ。なにしろ頼むよ」

亀吉は承知して帰った。

二

あくる二十八日の朝は空^{から}風^{かぜ}が吹いた。薬^{やげん}堀^{ぼり}の歳^いの市^ちは寒
かろうと噂をしながら、半七は格子の外に立って、町内の仕事師

が門松を立てるのを見てみると、亀吉は三十五六の男を連れて来た。

「親分。この男を連れて来ましたよ。わっしの又聞きで何か間違うといけねえから、その本人を引っ張って来ました」

「そうか。やあ、おまえさん。節季の忙がしいところを御苦労でした。まあ、どうぞ、こつちへはいつてください」

「ごめん下さい」

男は恐る恐るはいつて来た。かれは赭あから顔の小ぶとりに肥ふとった男で、左の眉のはずれに疱瘡ほうそうの痕が二つばかり大きく残っているのが眼についた。彼は下谷したやの稲荷町いなりちように住んでいる富蔵と名乗った。

「ただいま亀さんのお話をうかがいましたら、何かわたくしに御用がありますそうで……」

「なに、用というほどのむずかしいことじゃあねえので……。亀吉はどんなことを云つて嚇おどかしたか知らねえが、実はほんの詰まらねえことで、わざわざ来て貰うほどのことでもなかつた。ほかじゃあねえが、おまえさんは此の頃に猫の児をどうかしなすつたかえ」

「へえ」と、富蔵は案外らしい顔をした。「それを何か御詮議になるんでございますか」

「いや、別に詮議というほどの角張かくばつたことじゃねえ。ただわたしの心得のために少し訊いて置きたいことがあるのだ」

「へえ」と、富蔵はまだ呑み込めないように相手の顔をながめていた。

「そんなことは嘘かえ」

「なにかのお間違いで……。わたくしは一向に存じません」

話がまるで違っているので、亀吉も黙ってはいられなくなつた。

「おい、おい。なにを云うんだ。おまえが大事の猫を逃がしたと

云つて、さんざん愚痴ぐちをこぼしていたということは、仲間の者か

ら聞いて知っているんだ。隠しちやあいけねえ。さもねえと、お

れが親分に嘘をついたことになる。よく後あと先さきをかながえて返事

をしてくれ」

「でも、わたくしはなんにも知りませんのでございますから」

富蔵は皺しやが枯れ声ですらすらと弁じながら、飽くまでも知らない
と強情を張った。亀吉はどうとう腹を立てて、喧嘩腰でしきりに
問い落そうと試みたが、彼はどうしても口をあかなかつた。自分
は商売物の猫の児をなくした覚えはないと固く云い切つた。亀吉
も根こん負けがして親分の顔色をうかがうと、半七はしずかにうなず
いた。

「よし、判つた、判つた。こりやあ何かの間違いに相違ねえ。お
まえさん、朝っぱらから飛んだ迷惑をさせて、どうもお気の毒で
した。まあ、堪忍して帰ってください」

「じゃあ、もう帰りましても宜しゅうございますか」と、富蔵は
ほつとしたように云つた。

「ほんとうに堪忍しておくんなせえ。そのうちに何かで埋め合わせをするから」

「どう致しまして、恐れ入ります。じゃあ、これで御免を蒙ります」

忽々に出てゆく富蔵のうしろ姿を見送つて、亀吉は忌々いまいましそうに舌打ちをした。

「あの野郎、横着な奴だ。きようは無事に帰してやつても、すぐに証拠をあげてもう一度引き摺つて来てやるから覚えていやあがれ」

「まあ、熱くなるな」と、半七は笑いながら云つた。「あの野郎、猫をなくしたに相違ねえ。さつきからの様子で大抵わかつている。」

だが、それをむやみに隠すというのが判らねえ。ここでいつまでも云い合つていても論は干ねえから、今はおとなしく帰してやつて、あいつの家の近所へ行つてそつと訊いて見る方がいい。御用仕舞いでおれもきようは暇だから、ひるめし午飯でも食つてから一緒にぶらぶら出かけて見よう」

「おまえさんが一緒に来てくんなさりやあ大丈夫です。あの野郎、おれに恥をかかしやあがったから、邪が非でも証拠をあげて、ぎゆうという目に逢わしてやらにやあならねえ」と、亀吉は激しいけんまく権幕で時刻の来るのを待つていた。

午飯を食つて、二人がこれから出掛けようとするところへ、善八がぼんやりしてやつて来た。

「どうも面白い見付け物はありません。御存知の通り、麴町の三河屋は屋敷万歳の定宿じょうやどで、毎年五、六人はきつと巢を作つていますから、念のために其処そこへも行つてみると、案の定じょうそこにも五人ばかり来ていました。そのなかで市丸太夫という男の才蔵がまだ揃わないので、太夫は心配して朝から探しに出たそうです」

以前は日本橋の四日市に才蔵市さいぞういちというものが開かれて、三河から出てくる万歳どもはみな其の市へあつまつて、思い思いに自分の才蔵を扱えらむことになっていたが、天保以後にはそれがもう廃すたれて、万歳と才蔵とは来年を約束して別れる。そうして、その年の暮に万歳が重ねて江戸へ下くだると、主おもに安房上総下総あわかずさしもうさから出て来る才蔵は約束の通りその定宿へたずねて行つて、再び連れ立つ

て江戸の春を祝つてあるく。それが此の頃の例になつていたので、万歳はその都度つどに才蔵を選ぶ必要はなかつた。

おんごく

遠国 同士の約束は甚だ不安のようではあるが、義理の固い才

蔵は万一自分に病氣その他の差し支えがある場合には、差紙さしがみを

持たせて必ず代人を上げるのぼることになつていたので、大抵は間違ひ

も無しに済んでいた。その才蔵が約束通りにたずねて来ない、又その代人もよこさないとあつては、万歳の市丸太夫が当惑するのにも無理はなかつた。いくら立派な出入り屋敷をたくさん持つていても、才蔵を連れなない万歳は武家屋敷の門松をくぐる訳にはゆかなかつた。

「その才蔵はなんという名で、どこの奴だ」と、半七は訊いた。

「下総こがの古河こがの奴で、松若というんだそうです」

「松若……。洒落しやれた名だな」と、亀吉は笑った。「すると、親分。

その松若が詮議者ですね」

「で、その市丸太夫というのには逢わねえんだな」と、半七は念を押した。

「逢いません」と、善八は答えた。「なんでも五十二三の大柄の男で、酒を飲むとむやみに陽気に騒ぎ散らすと宿の女中が話していました。ふだんはまじめな面つらをしているが、なかなか道楽者らしい男で、酔うと三味線なんぞをぽつんぽつん弾やるといふことですよ」

「そうか。それじゃもう一度その三河屋へ行つて、市丸太夫の帰

るのを待つていて、その才蔵というのはどんな奴か、又その鬼つ児に何か心あたりはねえか、よく調べてくれ」

善八を出してやつて、ふたりは下谷の稲荷町へ足を向けた。朝からの空つ風が白い砂けむりを吹き巻いている広徳寺前をうろついて、ようように香具師の富蔵の家を探しあてた。鉤かぎの手に曲がつている路地の奥で、隣りの空地あきちには、稲荷やしろまつの社が祀られていた。近所で訊いてみようあたりと四辺あたを見まわすと、三十格好の女房が真つ赤な手をしながら井戸端で大東おおたばの冬菜ふゆなを洗つていて、そのそばに七つ八つの男の児が立つていた。

「もし、おかみさんえ」と、半七は近寄つて馴れなれしく声をかけた。「あすこの富蔵さんはお留守ですかえ」

「富さんはいませんよ」と、女房は素気なく答えた。「きようは薬研堀やげんぼりの方へでも行ったかも知れません」

富蔵は独身者ひとりもので、香具師というものの自分が興行をしているのではない。どこかの観世物小屋に雇われて木戸番を勤めているらしいことは、亀吉の報告でわかっていた。半七は小声でまた訊いた。

「あの富さんの家うちに猫が飼ってありましたか」

「猫ですか。あの猫じゃあ……」

云いかけて女房は口を噤つぶんでしまった。

「その猫がどうかしましたかえ」

女房は自分のうしろをちよつと見かえってやはり黙っていた。

素直には云いそうもないと思つて、半七はふところに手を入れた。

「ここにいるのはおかみさんの子供かえ、おとなしそうな児だ。

小父さんが御歳暮に紙鳶たこを買つてやろうじゃねえか。ここへ来ねえ」

紙入れから一朱銀を一つつまみ出してやると、裏うら店の男の児

はおどろいたように彼の顔をみあげていた。女房は前垂れで濡れ手をふきながら礼を云つた。

「どうも済みませんねえ。こんなものをいただきちゃあ……。おまえ、よくお辞儀をおしなさいよ」

「なに、お礼にやあ及ばねえ。そこでおかみさん、しつこく訊くようだが、その猫がどうしたのかえ。その猫が逃げたんじゃあね

えか」

「逃げたのならまだいいんですけど……」と、女房は小声で云つた。「殺されたんですよ」

「誰に殺された」

「それがおかしいんですよ。富さんのいない留守に化け猫と間違つて殺されてしまったんですが、そりやあ無理もありません。あの猫は踊るんですもの」

「それじゃあ商売物だね」

「まあ、そうですね。これからだんだん仕込もうというところを、化け猫だと思つて殺されてしまったんですよ。富さんも大変に怒りましたね」

一朱銀の効き目で、女房はその日の出来事をぺらぺらとしやべり出した。

三

富蔵の隣りにお津賀つがという二十五六の小粋こいきな女が住んでいる。

よほどだらしない女で、旦那取りをしているというのであるが、定きまった一人の旦那を守っているのでは無いらしく、大勢の男にかかり合つて一種の淫売じじく同様のみだらな生活を営んでいるのだと近所ではもっぱら噂された。そのお津賀のところへ稀まれにたずねてくる五十くらいの男があつて、それは自分の叔父さんで、一年に一

度ずつ商売用で上州から出て来るのだと彼女は云っているが、どうも上州者ではないらしく、又ほんとうの叔父さんではないらしい。それも例の旦那の一人であろうと長屋じゅうの者には認められていた。

四、五日前の夕方に、その叔父という人が久し振りにたずねて来ると、あいにくお津賀はいなかった。かれは独身者で、外へ出るときに表の戸にしつかりと錠じょうをおろしてゆくので、叔父ははいることが出来なかった。うす暗い門かどぐち口にぼんやりと立っている男の姿を気の毒そうに見て、井戸端から声をかけたのがこの女房であった。黙っていればよかったが、お津賀さんの帰るまで隣りの家へはいつて待っていると彼女は教えてやった。となりは富蔵

の家で、かれは戸をあけ放したままで町内の銭湯せんとうへ出て行つた留守であつたが、奪とられるような物のある家では無し、殊にその男の顔も見知つているので、女房も安心してそう教えたのであつた。すこし酔つてゐるらしい男は礼を云つて隣りへはいつて、上がりがまち框に腰かけてゐるらしかつたが、そのうちに三味線をぽつんぽつんと弾ひき出した音がきこえた。かれはお津賀の家へ来ても時々三味線を弾くことがあるので、女房も別に不思議には思わないで自分の米を磨といでしまつて家へ歸つた。

「それから騒動なんですよ」と、女房は顔をしかめて話した。

「富さんの家で何かどたんばたんという音が聞えたから、どうしたのかと思つて駆けつけてみると、富さんは湯あがりの頭からほ

つぽつ煙けむを立てて、その叔父さんという人の胸倉を掴んで、ひどい権幕で何か掛け合いを付けているんです。だんだん訊きいてみると、その人が富さんの猫を撲ぶち殺してしまったという一件なんです」

「なぜ殺したんだろう。だしぬけに踊り出したのかえ」と、半七は訊いた。

「そうなんですよ。踊り出したんですよ」

女房の説明によると、富蔵は自分の飼っている白い仔猫に踊りを仕込むために、長火鉢に炭火をかかん熾おこして、その上に銅の板を置く。それは丁度かの文字焼を焼くような趣向である。その銅の板の熱くなった頃に仔猫の胴中を麻縄で縛って、天井から火

鉢の上に吊りさげて、四本の足が丁度その銅の板を踏むようにすると、板は焼け切っているから、猫はその熱いのおどろいて、思わず前後の足を代る代るにひよいひよい揚げる。それを待ち設けて、富蔵は爪弾きで三味線を弾き出すのである。勿論はじめのうち猫の足どりを見て、こつちで巧く調子を合わせて行かなければならないのであるが、それがだんだんに馴れて来ると、猫の方から調子にあわせて前後の足をひよいひよいと揚げるようになる。更に馴れて来ると、普通の板や畳の上でも三味線の音につれて自然に足をあげるようになる。観世物小屋で囃し立てる猫の踊りは皆こうして仕込むので、富蔵もふた月ほどかかってこの白猫を馴らした。

根気よく馴らして教えて、猫もどうやら斯うやら商売物になるうとしたところを、かの男に突然撲ち殺されてしまったのである。勿論、殺した方にも相当の理窟はあった。かれは框に腰をかけてぼんやりと待っている退屈まぎれに、壁にかけてある三味線をと見付けて、少し酔っている彼はその三味線をおろして来て、ぽつんぽつんと弾きはじめると、長火鉢の傍にうずくまっていた白猫が、その爪弾きの調子にあわせて俄かに踊り出した。彼は実にびつくりした。うす暗い夕方の逢魔おうちまが時ときに、猫がふらふらと起つて踊り出したのであるから、異常の恐怖に襲われた彼は、もう何もかんがえている余裕もなかった。かれは持っている三味線を持ち直して猫の脳天を力任せになぐり付けると、猫はそのままころり

と倒れて死んだ。そこへ飼い主の富蔵が帰って来た。

誰がなんと云おうとも、ひとの留守へ無断には入り込むという法はないと富蔵は怒った。おまけに大切な商売物をぶち殺してしまつて、この始末はどうしてくれると彼は眼の色を変えて哮たけつた。その事情が判つてみると、男もひどく恐縮していろいろにあやまつたが、富蔵は承知しなかつた。自分も係り合いがあるので、かの女房も一緒に口を添えてやつたが、富蔵はどうしても肯きかないで、殺した猫を生かして返すか、さもなくばその償つぐない金を十両出せと迫つた。それをいろいろにあやまつて、結局半金の五両に負けて貰う事になつたが、男にはその五両の持ち合わせがないので、どうか大晦おおみそか日まで待つてくれと頼むのを、富蔵は無理におさえ

付けて、腕ずくでその紙入れを引たくってしまった。しかし紙入れには三分ばかりしか這入っていなかった。富蔵はまだ料簡しないで、これから俺と一緒に往つてすぐに其の金を工面くめんしろと責めているところへ、丁度にお津賀が歸つて来て、きつと自分が受け合うから今夜のところは勘弁してくれと頻りに富蔵をなだめて、無事にその男を自分の家へ連れ込んだ。

富蔵の猫はこういう事情で失われたのであつた。かれが半七に對して、飽くまで知らないと強情を張っていたのは、たとい自分に相当の理があるとは云え、物取り同様に相手を手籠てごめにして、その紙入れを無体に取りあげたという、うしろ暗い廉かどがあるからであろうと想像された。

「それからどうしたね。その男は後あとが金ねを持って来たらしいかえ」と、半七はまた訊いた。

「その晩は無事に済んで、その人はそれからお津賀さんの家で小こいつとき一刻も話して帰ったようでしたが、その明くる晩また出直して来ると、なんだかお津賀さんと喧嘩をはじめて、両方が酔っていたらしいんですが、お津賀さんはその人をつかまえて表へ突き出してしまつたんです」

「ひどい女だな」と、亀吉は眼を丸くした。

「そりやなかなか強いんですから」と、女房は嘲るように笑つていた。「お前さんのような意気地なしはどうだとか斯うだとか云つて、そりやあもうひどい権幕で……。かりにも世間に対しては

叔父さんだとか云っている人を、さんざん小突きまわして、表へ突き出してしまつたんです。それでも其の人はなんにも云わないで、おとなしくしおしお悄悄々として出て行きました。もつともお津賀さんにかかっちゃあ大抵の男はかなわないかも知れませんか」

「そのお津賀さんというのは家にいるかえ」と、半七はうしろを見返りながら訊いた。

おなじ裏長屋でもお津賀の家は小綺麗に住まっているらしく、軒にはかめいど亀戸らいよの雷除けの御札おふだが貼つてあつた。表の戸は相変わらず錠をおろしてあるので、内の様子はわからなかつた。

「ゆうべから帰つて来ないようですよ」と、女房はまた笑つた。「で、どうだい。隣の富蔵とおかしいような様子はないかね」

「そりやあ判りませんね。あの人のことですから」

「そうだろう」と、半七も笑った。「いや、日の短けえのに手間てま費づいえをさせて済みません。さあ、亀。もう行こうぜ」

女房に挨拶して、ふたりは露路の外へ出た。

「親分。不思議なことがあるもんですね」

「むむ、広い世間にはいろいろのことがある」と、半七はうなずいた。「だが、まあ、ここまで足を運んだ効能はある。それでもう大抵見けんとう当は付いたが、今度はその鬼っ兎の出どころだ。いや、それもすぐに判るだろう。それでお前の方はもう年明ねんあけらしい。

おれは脇へ廻るからここで別れようぜ」

「富の野郎はどうしましょう」

「さあ、今のところじやあしようがねえ。まあ打つちやつて置け」
「あい」と、亀吉は渋々に別れて行つた。

あまり長追いをするほどの事件でもないと思つたが、かれの性分としてなんでも最後まで突き留めなければ気が済まないのので、半七はその足で山の手まで登つてゆくと、冬の日はもう暮れかかつて寒そうな鴉の影が御堀の松の上に迷つていた。麴町五丁目の三河屋へたずねてゆくと、筋向うの煙草屋の店さきに善八が腰かけていた。

「親分、いけねえ。市丸はまだ帰らねえそうですよ」と、かれは待ちくたびれたように云つた。

「大きに御苦労。その市丸のところへ近ごろ女がたずねて来たら

しい様子はねえか」

「来ました、来ました。女中に聞いたら、なんでも小粋な二十五六の女が二、三度たずねて来たそうです。お前さんよく知っていますね」

「むむ、知っている」と半七は笑っていた。「もう大抵判っているんだから、きようはこのくらいにしておこう。おめえも数え日にここでいつまでも納涼^{すず}んでもいられめえ。家へ帰って嬪^{かかあ}が熨斗^{のし}餅^{もち}を切る手伝いでもしてやれ」

「じゃあ、もうようがすかえ」

「もうよかろう」

ふたりは連れ立って神田へ帰った。寒い風は夜通し吹きつづけ

たので、火事早い江戸に住んでいる人達はその晩おちおち眠られなかつた。とりわけて御用を持っているからだの半七は、いよいよ眼が冴えてまんじりともしなかつた。あくる朝七ツ（午前四時）頃から寢床をぬけ出して、行燈の灯で煙草をのんでいると、割れるように表の戸を叩く者があつた。

「誰だ。誰だ」

「わつしです。亀です」と、外であわただしく呼んだ。

「豆腐屋か。馬鹿に早えな」

家の者はまだ起きないので、半七は自分で起つて戸をあけると、亀吉は息をはずませて転げ込んで来た。

「親分。富蔵が殺やられた」

四

見す見す猫をなくしたのを強情に知らないと言い張って、たとい一時でも親分の前で自分に恥をかかした富蔵を、亀吉は心から憎んでいた。きのう半七に別れてから彼は吉原へ遊びに行つたが、あまり好くも扱われなかつたむしやくしや腹で、引け前に廊を飛び出して、阿部川町あべかわちようの友達を叩き起して泊めて貰つた。彼もこの強い風に枕を揺られておちおち眠られずにいる耳もとに、人の立ち騒ぐような声が遠くひびいた。火事かしらとすぐに飛び起きてその騒がしい方角へ駆け付けてみると、果たして火事には相違

なかつたが、それは稲荷町の長屋の一軒焼けで鎮まつた。

火事は先ずそれで済んだが、済まないのは、その火元に男が死んでいることである。死んだ男はかの富蔵であつた。一つ長屋のお津賀の死骸も井戸から発見された。

「こういうわけだから私ひとりじゃいけねえ。お前さんも早く来ておくんなせえ」

「よし、すぐに行く。なにしろ飛んだことになつたものだ」

半七は身支度をして、亀吉と一緒に出てゆくと、師走二十九日のあかつきの風は、諸刃もろはの大きい剣つるぎで薙なぎ倒そうとするように吹き払つて来た。ふたりは眼口めくちをふさいで転げるようにあるいた。

稲荷町へ行き着いてみると、富蔵の家は半焼けのままくずで頽れ落ち

て、咽むせるような白い煙りは狭い露路の奥にうずまいて漲みなぎっていった。町内の者も長屋の者も、その煙りのなかに群がってがやがやと騒いでいた。

「どうも騒々しいことでした」

きのうの女房を見掛けて半七が声をかけると、あわて眼まなこのかれも一朱くれたきのうの人を見忘れなかった。

「きのうはどうも……。でも、まあ、この風でこのくらいで済めば小難でした」

「小難はおめでてえが、なにか変死があるというじゃありませんか。焼け死んだのですか」と、半七は何げなく訊いた。

「それが判らないんです。あの富さんが焼け死んで……。お津賀

さんも……」

「そうですか」

半七はすぐに火元へ行つた。もうこうなつては^{めん}仮面をかぶつて
いられないので、かれは自分の身分を名乗つて、^{いえぬし}家主立ち会
いで焼け跡をあらためた。近所の人達が早く駈け付けて、すぐ叩き
毀してしまつたので、半焼けと云つても七分通りは毀れたままで
焼け残つていた。半七はその家のまわりを見廻りながら、ふとそ
の隣りの稲荷の祠ほこりに眼をつけた。

「この稲荷さまは無事だつたんですか」

「火の大きくならなかつたのも、お稲荷様のおかげだと云つて、
長屋じゅうの者も喜んでいます」と、家主は云つた。

「喜ぶのは間違っている」と、半七はあざ笑った。「お稲荷さまに御利益ごりやくがあるなら、はじめからこんな騒ぎを仕出来しでかさねえがい。家を焼いて、人を殺して、御利益もねえもんだ。いつそ刷毛はけついでにこの稲荷も燃もしてしまつちやあどうです」

無法なことを云うとは思つたらしいが、相手が相手なので、家主は苦にがり切つて黙っていると、半七は足あしもと下にまだちろちろと燃えている木のきれを拾つて松たいまつ明のように振りあげた。

「ようがすかえ。この稲荷に火をつけますぜ」

「お前さん。とんでもないことを……」

家主はあわててその腕を押えると、半七は委細かまわず又呶鳴はなつた。

「ええ、構うものか、こんな稲荷……。さあ、焼くぞ、こんな燧うちぼこ石箱いしばこのような小つぽけな祠ほこらは、またたく間に灰にしてしまうぞ。
野良狐のらぎつねが隠れているなら早く出て来い」

稲荷様もこれには驚いたのかも知れない。その声に応じて正面の扉がさつとあいた。しかも這い出して来たのは野良狐ではなかつた。それは頭から煤すすを浴びた五十前後の男であつた。

「お前は市丸太夫だろう。正直にいえ」と、半七はかれの腕をつかんだ。「どうも稲荷様の中でございと思つたら、案じょうの定じょうこんな狐が這い込んでいた。さあ、番屋へ来い」

町内の自身番へ引つ立てられて行つた男は、果たして彼かの市丸太夫であつた。かれはふところに小こがたな刀を呑んでいたが、その刃

には血の痕がなかった。

「お前は富蔵を殺して、火をつけたのか」

「恐れ入りました」と、市丸太夫は白状した。「全くわたくしは富蔵を殺そうと存じてまいりました。しかし殺さないうちに火事が出て、富蔵は焼け死んだのでございます」

「なぜ富蔵を殺そうとした」

「わずかの金に差し支えませんでしたのでございます」

かれは誤って富蔵の猫を殺した始末を正直に申し立てた。それは長屋の者の推察通り、彼は一昨年の春からお津賀に関係して、毎年江戸へ出るたびに彼女のところへ訪ねて来て、松の内に稼ぎためた金の大部分を絞り取られていた。今年も一年ぶりで訪ねて

来ると、あいにくお津賀は留守で、測^{はか}らずも隣りの猫を殺すような間違いを仕出来してしまった。

「お津賀のあつかいで、その場だけは勘弁して貰ったのですが、あと金の四両一分の工面^{くめん}がなかなか付きません。仲間の者も春にしなければ、まとまった金を貸してくれることは出来ませんので、わたくしも途方にくれました。差し当りお津賀の着物でも質^{しち}に入れて、なんとか融通して貰おうと存じまして、その明くる晩出直して相談にまいりますと、劍もほろろの挨拶で断わられました。ふた言三言云い合っていますうちに、お津賀は気の強い女で、とうとう私をつかまえて表へ突き出してしまいました。いい年を致して若い女に係り合いました、飛んだ恥を申し上げなければな

りません。それでしおしお々帰りますと、あくる日お津賀がわたくしの宿へ押し掛けて参りまして、後金を早くどうかしてくれなければ近所へ対して面目がないと強請せがみます。その日はまあなんとかなだ宥めて帰しますと、あくる日もまた押し掛けて来てやかましく申します。宿の手前、仲間の手前、お津賀のような女に毎日押し掛けて来られましては、わたくしもどうしてよいか、実に消え入りたいくらいで……」

若い女にさいなまれている老人の懺悔ざんげを、半七は嘲るような又あわれむような心持で聴いていると市丸太夫は恐る恐る語りつづけた。

「そういう次第で、わたくしも途方に暮れて居りますうちに、宿

の女中から不図ふとこんなことを聞きましたのでございます。昨年の夏頃から宿に奉公して居りましたお北という若い女中ぬしが主の定まらない胤たねを宿して、だんだん起居たちいも大儀になつて来たので、この七月に暇を取つて新宿の宿やど許もとへ歸つて、十月のはじめに女の児を無事に生み落しました。ところがその赤児はどうした因果か、生まれるときから上顎に二本の長い牙きばが生えている鬼でございまして、本人は勿論、兄弟たちも世間へ対して外聞が悪いと申して、ひどく困つていふことを聞きましたので、わたくしはすぐにそのお北の家へたずねて参りました。お北とは顔馴染みでございまして、本人に逢つてその赤児をみせて貰いますと、なるほど立派な因果者でございまして。正直のところわたくしはとても差

し当って四両一分の工面は付きませんから、この因果者を富蔵のところへ持つて行つて、猫の形代かたしろに受け取つて貰おうと存じまして、この兎をよそへやる気はないかと訊きますと、実は持て余しているところだから、片輪を承知で貰つてくれる親切な人があれば、何処へでもやりたいと申します。それでは一度相談して来ようとして約束して帰りました、その足でお津賀のところへ行つて相談しますと、隣りの富蔵はあいにく居りませんでした、お津賀はその話を聞きまして、それがまったく商売になりそうなものならば富さんも承知してくれるかも知れないから、ともかくもその因果者を連れて来てみせろと申しました」

「それでどうとうその赤ん坊を取つて来たのか。おめえも無慈悲

な男だな」と、半七は苦々にがにがしそうに云った。

「重々恐れ入りました。ごさいます。無慈悲は万々承知して居りましたが、なにぶんにも背に腹は換えられないと存じまして……。お北の方へはよいように話をしまして、ともかくもその鬼つ兎を受け取つてまいりますと、ちようど途中で才蔵に逢いました。松若はわたくしの宿へたずねて来る処でございましたから、これは幸いだと存じまして、あらましのわけを話して其の兎をお津賀の家へとどけてくれるように松若に頼みました。松若もわたくしと一緒に行ったことがあるので、お津賀の家はよく知っている筈でございます。それは二十六日の宵の五ツ（午後八時）少し前でございましたが、松若はそれぎり帰つてまいります。どうしたの

かと案じて居りますと、そのあくる日の午過ぎにお津賀が又押し掛けてまいりまして、あの因果者はどうしたと催促いたします。

ゆうべ松若にとどけさしたと云いましてもなかなか承知しませんで、いろいろ面倒なことを申しますので、わたくしもいよいよ困り果てました。そればかりでなく、だんだんその様子を見ていますと、お津賀はどうも富蔵と情交わけがあるのではないかと思われるような所もございしますので、わたくしもなんだか忌いま々しくなりまして、今思えば実に恐ろしいことでございます。いつそ富蔵とお津賀を殺してしまえば、誰にも窘めいじられることは無いと存じまして、夜店で買いました小刀をふところに入れて、昨晚の夜ふけに稲荷町へそつと忍んでまいりますと、案の通りお津賀は隣りの

家へはいり込んで、富蔵と差し向いで睦じそうに酒を呑んでいました。わたくしは赫かつとなつてすぐに飛び込もうかと存じましたが、なにぶんにも相手は二人でございますから、何だか気怏きおくれがして、しばらく様子を窺つて居りますと、ふたりはだんだんに酔いが廻つて来まして、つまらないことから喧嘩をはじめましたが、お津賀もきかない気の女ですから、とうとう立ち上がつて掴み合いになろうとするはずみに、そばにある行燈あんどうを倒しました。富蔵はもう酔っているので自由に身動きも出来ません。お津賀はあわててその火を揉み消そうとしましたが、これも酔っているので思うようには働けません。唯うろたえてまごまごしているうちに、火はだんだんに拡がってお津賀の裾や袂に燃え付きました。わたく

しは呆氣あっけに取られて眺めていますと、お津賀はもうからだ中が一面の火になってしまいました……」

その当時の凄惨な光景を思い出すさえ恐ろしいように、市丸太夫は身ぶるいした。

「結い立ての天神鬘を振りこわして、白い顔をゆがめて、齒を食いしばって、火焙ひあぶりになつて家うちじゆう中を転げ廻つて、苦しみがいている女の姿は……。わたくしのような臆病者にはとてもふた目とは見ていられませんので、思わず眼をふさいでしまいますと、お津賀ももう堪まらなくなつたのでございましょう。框かまちから土間へ転げ落ちたような物音がきこえました。わたくしははつと思つて再び眼をあきますと、お津賀の燃えている姿は井戸の方へ……。

からだの火を消す積りか、それともいつそ一と思いに死んでしま
う積りか、それはわたくしにも能く判りませんでした。ともか
くも井戸側の上で火の粉がぱつと散ったかと思うと、お津賀の姿
はもう見えなくなつたようでございました。富蔵は……どうした
のか存じません。もうその頃には家中いっぱいの火になつていま
した。その騒ぎを聞きつけて近所の人達がばたばた駈け付けて来
ましたので、わたくしも度を失いまして、ここらにうつかりして
いて、とんだ連まきぞえ坐を受けてはならないと、前後のかんがえも無
しにあの稲荷の祠ほくらのなかに隠れましたが、もしその火が大きくな
つてこつちへ焼けて来たらどうしようかと、実に生きている空も
ございませんでした。幸いに火は一軒焼けて鎮まりましたが、大

勢の人が火元を取りまいてわやわや騒いでいるので、いつまでも出るに出不れず。わたくしも途方に暮れているところを、とうとうお前さんに探し当てられてしまいました。行燈を倒したときに、わたくしも早く駆け込んで、一緒に手伝って消してやればよかったのでございませうが、わたくしは唯びっくりして居りまして……」

びっくりしていたばかりではない。そこに残酷な復讐の意味が含まれているらしいのを半七は想像しないわけには行かなかつた。「おめえが直接じかに手をおろさないで、お津賀も富蔵も一度に片付けてしまえば、こんな世話のねえ事はねえ」と、半七は皮肉らしく云った。「だが、おめえも罪な人間だ。才蔵の松若はおめえの

使に行く途中で凍え死こじんでしまったぜ」

「松若が死にましたか」と、市丸太夫は更にその顔を蒼あおくした。

「その鬼つ児をかかえて行く途中で、あんまり酒を飲み過ぎたせいでだろう。食らい酔ったままで鎌倉河岸にぶつ倒れて、可哀そうに凍え死んでしまったんだ。鬼つ児に別条はねえ。親元が判つたらこつちから渡してやる。おめえにうっかり渡して、又なにかの種に使われちゃあ堪まらねえから」

市丸太夫はもう一言もなかった。彼はゆがんだ皺しわづら面を灰いろにして、死んだ者のようにうずくまっていた。

長い牙を持った因果者の赤児は、生みの母のお北に引き渡され

た。市丸太夫は表向きに彼を罪にすべき廉かどもないので、ただ叱り置くというだけで免ゆるされたが、すぐに宿を引き払って故郷へ帰った。それから後の江戸の春に市丸太夫の万歳すがたはもう見えなくなつた。

青空文庫情報

底本：「時代推理小説 半七捕物帳（二）」光文社文庫、光文社
1986（昭和61）年3月20日初版1刷発行

入力：tat_suki

校正：おのしげひい

1999年9月11日公開

2004年2月29日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランテイアの皆さんです。

半七捕物帳

三河万歳

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

著者 岡本綺堂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>